博物館学雑誌 第35巻 第1号（通巻51号）65～75ページ 2009年12月

【研究ノート】

# 博物館展示と地域像相対化の可能性
## —足立区立郷土博物館における新常設展示の検討から—

A museum exhibition and the possibility of regional image relativization
—From the examination of a new permanent exhibit in ADACHI MUSEUM—

内山　大介※

Daisuke UCHIYAMA

### はじめに

足立区立郷土博物館は1986年に開館した足立区教育委員会の設置するいわゆる「地域博物館」である。開館から22年の歳月を経た現在まで、継続的に毎年数回の特別展示・企画展示を行い、また常設展示も展示ケースの増設などの形で一部には変更を行ってきていた。しかし、全体としてはケースや模型・パネル等に古さを感じるようになり、またこれまで行われてきた調査研究の蓄積によって、展示内容自体も館の諸活動全体から取り残されている印象があった。こういった状況をふまえながら、開館20周年を契機に展示の改修計画策定が進められ、2009年3月15日、古くなった常設展示を全面改修してリニューアルオープンを果たした。約半年間の休館で、常設展示の全面的な改修のほか、付設する庭園のユニバーサルデザイン化、建物内部の改修、館蔵資料情報データベースの構築などが同時並行的に進められたのであった(註1)。

足立区の事例をはじめ、近年特に都内や近郊の博物館を中心に常設展示の全面あるいは一部改修という事例が増えているという印象がある。構想段階のものを含めると、多くの博物館で既存の展示を変えていこうという意識が高まっているようだ。それには、多くの博物館において開館以来の展示が物理的にも内容的にも耐用年数の期限を迎え始めているということもあろうし、また利用者や行政の側から博物館が新たな役割を期待されているということでもある。

しかし、こういった改修事業の結果として生まれた新しい展示の意義や課題、成果は来館者数等の数字以外ではなかなか語られないのが実情である。そこで本稿では足立区立郷土博物館を事例にとり、その新常設展示の概要を紹介する。さらに、展示とそこから創り出される地域像がどのように意義づけられるのかを、特に「地域博物館」史上における位置から考えてみる。筆者は以前、伊藤寿朗の議論以降広がった地域博物館論の中で、「参加・体験」重視の開かれた博物館

※ 足立区立郷土博物館専門員、神奈川大学大学院歴史民俗資料学研究科博士後期課程

が増えた一方、利用者と博物館の最も基本的な接点である展示そのものを俎上に上げた議論が等閑視されていることを指摘したことがある（内山2007）。本稿はその指摘を踏まえた上で、「地域博物館」における展示が創り出す地域像のあり方を博物館学・博物館史と現場との連関の中で考える、筆者なりのひとつの試みである。そこで、常設展示の紹介に入る前に、検討の前提として日本における「地域博物館」のあゆみを概観することからはじめたい(註2)。

## Ⅰ．日本における「地域博物館」のあゆみと理念

### 1．戦前における「郷土博物館」の成立と理念

日本において、各地に小規模な博物館が盛んに設立された時期は、戦前・戦後に1度ずつ、大きく分けて2つの時期がある。伊藤は、「博物館にとって1930年代前半は、①大都市中型単科博物館、②地域小型総合博物館（郷土博物館）という2方面からの博物館続出の時代であり、それに対応して博物館の急速な理論化が試みられた時期でもある」（伊藤1978　pp.436）と指摘するが、中でも「郷土博物館」の設立は、1920～30年代の軍国主義下、郷土の自然・文化・歴史を題材に愛郷心・愛国心の涵養を促す教育実践としての郷土教育運動がその主要な契機となった。その過程では、学校における郷土科の設置、郷土調査の実施、郷土誌の編算、郷土博物館の設立などの様々な施策が推奨され、中でも師範学校を中心とする校舎内に「郷土博物館」「郷土館」「郷土室」「郷土資料室」などと呼ばれる施設の設置が進められた。これらは国からの「郷土教育施設費」交付により広がりをみせ、その活動は様々な教育関係冊子などで盛んに紹介され、運動が盛り上げられたのである。

例えば埼玉県師範学校では、「正しい郷土の認識」と、「愛郷心の養成」のため「郷土の自然人文あらゆる事象を綜合的に観察し、それらの事象が全一体として如何に結合し合ってゐるか」を見極めるために、「特に綜合的有機的」な郷土館を設置した（内川1991　pp.63）。また福島県女子師範学校では、「自然及び文化を理解する」ことで、「愛郷心を涵養」し、「愛国心を養」うために「郷土資料室」を設置したが、そこでは「郷土の自然並に文化を語る総ての標本を蒐集」したという（福島県女子師範学校1933　pp.79－84.）。

このような、当時の「郷土博物館」に与えられた性格は、戦前期の博物館界における主導的立場として活躍した棚橋源太郎も様々な場面で述べている。戦前には博物館の種類について様々な呼び方が混在していたが、それを概念的に整理しようとしたのが棚橋だった。その代表的な著書『眼に訴へる教育機関』では、国の経営による全国的な性格を具えた中央機関としての「中央博物館」と、「科学、美術及ビ歴史ノ資料ヲ包括セル普通博物館」で「地方的色彩ヲ濃厚」にした機関としての「地方博物館」を分けている。さらに著書『郷土博物館』では、「郷土博物館」とは「地方博物館」・「町村博物館」を含むものであると定義し、それは「歴史考古及び土俗参考品工藝品天産及び産業資料」を網羅する専門分化しない「普通博物館」であるとの性格づけを行った。「郷土博物館」では、ある分野に特化するのではなく諸方面の資料の「有機的連絡」を重視するものであるという。さらにその基礎となる「郷土概念」とは、「地域における自然人文両

方面の要素から、培はれ」たもので「愛郷土的感情が根幹」にあるものであると主張した。

このように、戦前期における「郷土博物館」の性格は、「地方的色彩」の濃い資料を収集した「普通博物館」としての性格を持ったものであり、また自然・人文各事象の資料を「総合」し、それらの「有機的連絡」から郷土の一体性を表現しようとした施設だった。これらはすなわち、運動としての郷土教育における、愛郷心・愛国心の養成へつながっていく装置であったのだ。

### 2．戦後における「地域博物館」の成立とその理論

戦後においては、文化財保護法や博物館法といった法体系の整備、明治100年記念などといった自治体の記念事業、さらには文化財保護意識の高揚等によって、市町村立博物館が多く設立された。また、高度経済成長期における国庫補助金により歴史民俗資料館建設が進められている。これらの博物館を戦前のそれと比較して理念の面で特徴的なのは、博物館側あるいは設置者側の論理ではなく、利用する市民や来館者の立場がより強調されているという点である。

戦後の博物館界において、利用者の立場から博物館を語った研究者の一人に加藤有次がいる。加藤は、「博物館を利用する立場」から博物館を３つの分類に分けて理解しようとした。それは、「地域社会型博物館」・「観光型博物館」・「研究型博物館」という分類である（加藤1977 pp.70－72.）。加藤によれば、博物館にはそれぞれの型式ごとの「博物館地域社会」が存在するという。そして博物館はその利用者をどの範囲にとらえるかが重要であると指摘した。またこれと同様な主張をしたのが倉田公裕である。加藤と倉田は上記のような考え方をもとにして、秋田県立博物館の建設計画をたてた。そこで重視されたのは、「博物館地域社会」へのアプローチとしての「郷土学」というとらえ方である。倉田によれば、秋田県立博物館は地質・考古・歴史・生物・民俗・美術・工芸の７部門をもち、従来の「百科事典的総合」「併存的総合」でなく郷土学（秋田学）を中心とした「綜合博物館」であるとしている（倉田1979　pp.219－230.）。

その後、これらの考え方に対して独自の主張を提示し、1980年代以降の博物館界に大きな影響力をもったのが伊藤寿朗である。伊藤は「博物館地域社会」の考え方を「面としての地域のとらえ方」とした上で、それは「市民を利用者へと客体化すること」であって、「市民自治の思想を欠落させていた」と批判した。その上で、博物館の目的により「地域志向型博物館」・「観光志向型博物館」・「中央志向型博物館」に分類し、中でも「地域志向型博物館」は、個別細分化された専門分野の法則性を地域に適用するのではなく、「地域課題」に即した自然科学と人文・社会科学の総合化により、逆に地域の価値を発見していくものであるという主張を繰り返したのだ（伊藤1986、1991）。伊藤は実際の博物館の中でも平塚市博物館の活動を取り上げ、同館を「地域博物館の旗手」と評し、講座・サークル活動、教育普及事業を中心に、利用者の「参加・体験」を重視した活動を高く評価したのだった。

### 3．「郷土博物館」・「地域博物館」と「地域」のとらえ方

戦前から戦後における「郷土博物館」・「地域博物館」の理念的な特徴の変遷をみると、国や

博物館側の視点による愛郷心・愛国心の養成のための活動という性格をもった戦前から、利用者や対象とする地域社会側の視点による地域の理解のための性格をもった戦後へ、という流れがみてとれる。しかし一方で、対象地域や資料のとらえ方には一貫した特徴が浮かび上がる。上記のように出発点や目的は異なるが、「郷土博物館」・「地域博物館」に求められてきたのは、対象とする「郷土」・「地域」を多分野横断的な「総合」的視点によるアプローチで理解しようとする志向である。そしてこのような「総合」的性格をテーマとして打ち出す博物館は現在も非常に多く存在しているといえよう。例として近年の博物館におけるテーマ設定をみてみると、例えば「相模川流域の自然と文化」(平塚市博物館)、「川と台地と人々のくらし」(相模原市立博物館)、「大地、水、人」(北区飛鳥山博物館)、「山梨の自然と人」(山梨県立博物館) など、人と自然、環境と文化といった、自然科学と人文科学との融合による「総合」的なテーマが多くみられる。

このような博物館の性格には、意義と問題点が指摘できる。つまり中央の大型博物館や大学等の研究機関による専門分化した研究の方向性に対し、地域に立脚して、専門分野に縛られない博物館の独自性という意義がある一方、各分野における多様な地域像を捨象し、単一の固定化した地域像の提示となる危険性を秘めているという問題点があろう。博物館展示のメディアとしての特異性について福田珠己は、それが「原物をともなう表現である」ことから「展示の著者やその背後にあるイデオロギーを隠し、人々に、絶対的普遍的なものと対峙しているという錯覚を抱かせる」と指摘する (福田1998　pp.33)。つまり展示により一方向的に示される地域像は、そのままそれが自然なもの、客観的な「地域」そのものとして受け入れられてしまう危険性を常に帯びているということである。「地域」を対象とする「地域博物館」はそのことに自覚的であるべきだし、それを踏まえたうえで、利用者主体の博物館としては自館の行う展示により作られる地域像を常に相対化しながら、利用者自身による地域像の構築を促すような取り組みが必要であろう。

## Ⅱ．旧常設展示と新常設展示

### 1．旧常設展示とリニューアル

上述したように、足立区立郷土博物館は開館から20年以上にわたって大きく変えることなく常設展示を続けてきた。その展示内容は、1階のホール展示「足立のまつり」、第1展示室「足立の歴史」、および2階のギャラリー展示、第3展示室「足立のくらし」の大きく3つのテーマ、4つの部門で構成されていた (第2展示室は企画展示室)。第1展示室は原始・古代から近現代までを通史的に紹介した歴史展示であり、またギャラリーは様々なトピックごとのテーマ展示、さらにホールと第3展示室は祭りや暮らしをテーマとした民俗展示ということになる。この旧常設展示と比較して今回の新しい展示の大きな特徴をあげるとすれば、近世以降の展示に特化したこと、そして全体をテーマ展示にしたこと、の2点となる。学問領域的にいえば、近世史・近現代史と民俗とが融合したテーマ展示といえるわけだが、これらの変化を含め、博物館としては今回のリニューアル全体に関して、大きく4つの柱を打ち出して広報活動を行ってきた。それは以下のようなものである。

①通史展示からテーマ展示へ

これまで行ってきた原始・古代から時代順を追って展開する通史展示ではなく、足立が都市近郊として発達した江戸時代以降の展示へと移行する。

②テーマ展示「江戸東京の東郊」

江戸幕府による土地開発、近代以降の大都市東京との人・物資のつながり・交流を重視したテーマ展示となる。現足立区域の原型を江戸東京の近郊としての姿に求め、特に東の近郊を展示のキーワードにしていく。

③子どもも遊べる博物館

静かに資料を鑑賞する博物館から、会話の生まれる博物館をめざす。情報機器による資料や情報の発信、資料と身近に触れ合える子どもホールを設置し、来館者の体験・発見を重視する。

④区民と協働する博物館

博物館とともに研究をすすめる登録グループ12団体による活動の成果を発表できる場や機会を提供していく。

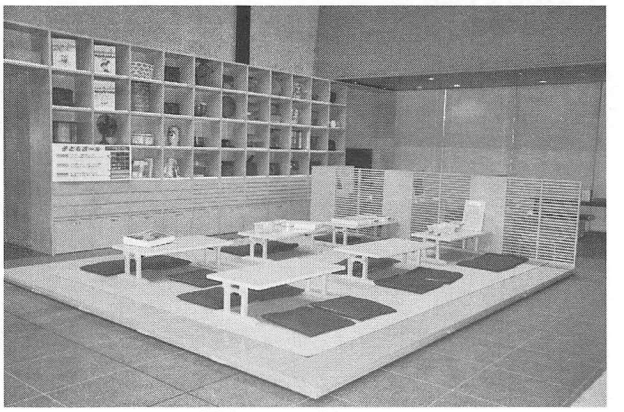

写真1　子どもホール

## 2．新常設展示のストーリー

新常設展示のストーリーの概要を、展示スペースごとにまとめるならば以下のようになる。

入口すぐのスペースは「子どもホール」とされ、身近に見たり、触れたりする資料を多く展示し、特に子どもが資料と身近に触れあえる展示スペースとなっている。第1展示室には主に農業にかかわる展示があり、「東郊農村の誕生」「農家と耕地」「江戸東京の米どころ」「下肥の利用」「東郊の名野菜」「やっちゃ場の賑わい」「市場の役割と歴史」「花づくりの発展」といったコーナーが並ぶ。全体としては、米や野菜、花卉などの生産が発達したことを示し、その大きな要因として、肥料としての下肥の供給地であり農産物の大消費地でもあった大都市江戸東京の存在があったことを示している。2階ギャラリーでは、「お化け煙突と工業化」「近代産業のはじまり」「工場街アルバム」などで戦後の工業地化した東郊地域を表現した。さらに都市の人々の観光地としての名所の成立や、都市の祭

写真2　第1展示室　やっちゃ場の賑わい

りを演出する際物作りなど、江戸東京の文化を担った東郊の役割を伝える。最後に第2展示室「新しいまちのくらし」「都営住宅とくらし」のコーナーには、都心部からの大量の人口流入にあたって進められた区画整理と、生活の場としての都営住宅の原寸大復元による展示が行われている。いずれもが、江戸東京の存在を前提とした東郊地域の歴史的な役割を表現している。

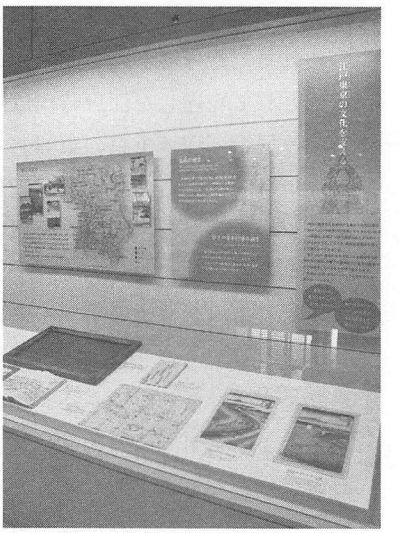

写真3　ギャラリー
江戸東京の文化を支える

また今回の展示の中で特徴的なのは、機械機器類を使った映像・音・光などを駆使した展示が姿を消したこと、もうひとつは模型が多く登場していることである。新しい展示には大きく分けて、以下の7つの模型が登場している。

・農村の縮小模型、農家・屋敷の縮小模型、セリ田の縮小模型
・肥溜めの原寸大模型
・千住青物市場における問屋建築（軒先）の原寸大模型
・チューリップフレームの原寸大模型
・おばけ煙突（千住火力発電所）の縮小模型
・区画整理関係の縮小模型
・昭和30年代の第二種都営住宅の原寸大模型

これらはすべてストーリー上の重要な場所に配され、実際に体感できる形で展示のメッセージを来館者に伝えている。

## Ⅲ．新常設展示の意義と課題

### 1．テーマ「江戸東京の東郊」のもつ意義

博物館史上に新しい展示を位置づけたときに、一つの大きな意義がみえてくる。それは、全体のテーマである「江戸東京の東郊」という地域の見方そのものである。

そもそも「近郊」あるいは「郊外」という言葉は、社会学的には「都市の外縁に広がる住宅地域。都市拡大の結果生じ、そこでの生活様式は、都市的である点で農村とは区別されるが、主に中間層の核家族から成り、同質性が強く、子どもの養育への志向などの点で都心とも対極をなす。」（吉見1994　pp.278）と定義される。近郊地域とは、都市の生み出した地域であり社会であるが、都市とは異なり、また農村とも一線を画す場であるのだ。また社会学者である若林幹夫は、「郊外は、都市との関係で現れてくる領域であり社会である」（若林2000　pp.23）と述べている。近郊と郊外にはその意味内容に差異があるが、いずれも都市という存在を前提にした概念であり、地域のとらえ方であるといえよう。近郊とはそのような、都市との関係性を基礎に置いた考え方なのである。

また今回の新展示のテーマは、「江戸東京の近郊」ではなく、「江戸東京の東郊」である。つまり大都市江戸東京だけでなく、そこには西の近郊（西郊）に対する東の近郊（東郊）という視角も含んでいる。再び社会学的な知見を援用するならば、西郊とはホワイトカラー層を中心とした社会であり、「白い郊外」といわれ、対照的に東郊とはブルーカラー層が中心の「青い郊外」という比較がなされる（若林2007　pp.74－76.）。このように、「江戸東京の東郊」というテーマは２つの意味での相対的な地域観が含まれているということになる。

さらにこの「東郊」というとらえ方の最後に重要であると考えられるのは、江戸四宿のひとつでもある「千住」という場である。近世以来の千住宿とそこに付設された市場は、付近を流れる河川や日光道中などの街道に恵まれた交通の要所であったし、さらに近代以降は鉄道も敷設されてその性格を持ち続けている。この千住には多くの人、モノ、情報などが集まり、江戸東京と足立区域を往来していた。大都市江戸東京と後背地である農村の境界領域として、千住の歴史的意義を再確認することも今回の展示の大きなテーマである。その千住について今回は、一般的な博物館にも多く、また旧常設展示にもあった「宿場」の展示から、新たに「市場」の展示へと転換した。特に「やっちゃ場」とよばれた千住の青物市場は江戸時代には三大青物市場として神田・駒込とともに並び称され、特に東郊地域で多く生産されてきた青物野菜の集積地としての一大拠点であった。戦災で壊滅してしまったこの「やっちゃ場」における青物問屋の原寸大復元は、都市と東郊との交流の象徴であるといえる。

これらの点を博物館史上で意義づければ以下のようになるだろう。戦前から戦後にかけて、「郷土博物館」・「地域博物館」が表現しようとしてきたテーマの多くは諸事象の「総合」から創られる総体的な地域像であった。「人と自然」「環境と文化」をベースとした対象地域内における各分野の有機的な関係づけから描かれるのは、その地域内部で完結した歴史・文化の姿であることが多い。それらと比較すると今回の新しい展示は、「総合」的視点から表現される固定化された地域像ではなく、前方に大都市江戸東京、後背地としての農村（あるいは住宅・工業）地域、その境界領域としての「千住」という、様々な地域間の多様な関係性の中に歴史や文化をとらえようとする視点がある。この地域間の関係性という視点は、江戸東京のとらえ方によって地域の多様な描き方が可能となるものであるし、また西と東という比較からも違った地域像が見えてくる可能性を秘めている(註3)。つまり、総体的な展示でなく相対的な展示の試みといえるのであり、ここに「地域博物館」における地域像の提示にからむ新しい視点が隠されている。それは逆に言えば、今後の調査研究や特別展示等による多様な地域観の提示が重要となるし、期待されるということでもある。

### 2．新常設展示の課題

一方で、今回の新しい展示の試みは多くの課題も抱えている。そのひとつは、歴史的な負の要素への接近と、そこから表れる現代的問題の克服である。今回の展示には当初から、従来良いイメージで語られることの少なかった歴史事象を区域の重要な歴史的要素として位置づけるという

志向があった。

足立区域は大規模に新田開発が行われた近世から戦後にいたるまで、農業地帯として発展してきた。特に都市近郊として、河川や街道などの地の利・流通の便を活用した大都市江戸東京向けの商品作物（米・野菜・花卉など）の栽培が多くみられた。しかし、山林の少ない東郊地域において、その肥料として大きく依存したのは都市から生み出される人糞尿＝下肥であった。この下肥を江戸東京から獲得し、それを利用して農産物を栽培し、都市向けに出荷するという循環が資料・模型・パネルで表現されている。また、近代の東郊地域では河川沿岸を中心に工場街が発達した。近世以来の再生紙である地漉紙を起点とした紙産業や皮革産業、製靴業などの工場が建ち並んだ。それらを写真パネルで示し、またその象徴としての千住のお化け煙突を縮小模型で展示している。これら工場の進出は、都心部での確保が困難になった平坦で安価な土地や、利便性の高い水利・交通網などを利用したものであった。また多くの産業が入ってくるのに伴って、人も多く流れ込んだ。特に高度成長期を中心に、都会で飽和状態となっていく人口を受け入れたのが近郊地域であり、特に規格品としての住宅である都営住宅が大量に生産され、労働力としての低所得者層の受け皿ともなっていった。

これらの展示に登場する個々の要素は、これまであまり良いイメージでは語られてこなかったことが多く含まれている。それらを新しい展示では東郊の特徴である都市との関係性の中に組み込んで表現している。しかし、展示において表現されるのは歴史的な過去の一要素としてであり、現代的な問題にもつながってくるその本質にまで迫っているとは言い難い。戦後における多くの工場の進出を表現しながらも、そこから生まれた公害問題は展示には表現されないし、大量の都営住宅建設の背景にある貧困やそれによって顕在化する生活格差の問題には目を伏せている。また下肥の利用や地漉紙生産は、肥を汲むオワイヤと呼ばれる人々、不要となった紙を買ったり拾ったりする紙屑買い・屑拾いといったような人々の存在が前提としてある。これらは、近世以来の生業・産業と、それを担い、支える人々の社会的地位や人権という重要な問題に関わる側面であるが、その核心的な部分には触れていない。このような、過去から現代にまでつながる近現代史の負の要素をどのように表していくのか。もちろんそれは、表現の仕方によっては個人の人権を侵害したり利益を損ねてしまう可能性があるために、表し難い内容であることは確かである。しかし、トピックとして扱っている個々の要素にはそういった問題に広がる可能性が大いに秘められているし、また近郊地域の役割として真に位置づけるためには、そのような課題にも対応していかなければならない。実体験にもとづいた、リアルな歴史として来館者の目に映る可能性の高い展示内容であるだけに、それらを地域の歴史の中にしっかり位置づけていく作業が必要である。特に近年はそういった問題への果敢な取り組みが、いくつかの博物館でも試みられるようになってきており、期待される部分でもある。但しその際には、博物館の、あるいは歴史叙述を形作る研究者としての学芸員の歴史観がダイレクトに問われることはいうまでもない。

また、展示資料そのものに関わる課題もある。今回の新しい展示は旧常設展示と比較すると、大きく印象が異なるものの、資料点数自体はさほど変わらない。しかし、グラフィックパネルを

はじめとするパネル類の大幅な増加、ストーリー上の要所に置かれた縮小模型と巨大な原寸大復元模型の圧倒的な存在感、さらにはテーマ性重視の展示構成といった諸要因により、実物資料が持つ意味は相対的に縮小していると言わざるを得ない。それぞれの時代の代表的な資料を展示する通史的展示から、「江戸東京の東郊」というストーリーを重視するテーマ展示へと移行したことは、資料や模型相互の関連性を際立たせた一方で、資料自体のもつ固有の意味を希薄にしている。このような問題について中村ひろ子は、「モノを見せるのか」「モノで見せるのか」という博物館の本質的な議論の中で、昨今における、学問の成果を提示する展示への志向やテーマ性重視の傾向を踏まえながら、「研究成果の伝達還元を目ざすことが、展示におけるモノの持つ意味を小さくしている今日、『モノを見せる』ことの意味を再確認する必要があろう」と指摘している(中村1998　pp.15)。この指摘は真摯に受け止める必要があろう。「江戸東京の東郊」というストーリーには組み込まれない多様な資料を展示する場としては、個別資料を身近に見ることのできる「子どもホール」の存在があるが、これらの今後の運用や、企画展示・特別展示等を通した実物資料への迫り方は、館にとっての今後の課題になると思われる。

**おわりに**

最後に展望を述べてまとめとしたい。ここまで、「地域博物館」のあゆみを概観したうえで足立区立郷土博物館の新常設展示についての紹介とその意義・課題を述べてきた。それらを踏まえた上で重要になってくるのは、今後の博物館活動である。特に常設展示を様々な点から意識した特別展示・企画展示のあり方が問われよう。常設展示を補う上でも、あるいは相対化していく上でも、展示という同様のメディアを利用したメッセージの伝達は重要である(註4)。

ここで、2007年に大阪人権博物館で行われたシンポジウムでの、吉田憲司・福田珠己の議論を引いてみたい。吉田は近年の民族誌展示の動向を整理した上で、民族学博物館における先住民などの積極的な展示への関与から、展示する側・される側・見る側に双方向・多方向的な回路が開かれるようになってきたと指摘し、特に展示対象となる文化の担い手自身が展示に参加していくことに意義を見出している（吉田2007)。また福田は、展示のなかで創られる「地域」を暗黙のうちに前提とせず、「地域」なるものに向けられた視線やそれを形成する人間・社会関係をみすえていくこと、その志向をはぐくむ場としての博物館があるべきだと説いた。そしてそのためには、多様な当事者の声を通して社会のなかで見過ごされている部分を可視化することであり、それが自明で中立的な「地域」をゆるがす可能性を有するとまとめた（福田2007)。

いずれも、展示という表現手法があらゆる人々にとって身近なものになったという状況を背景とし、当事者自身の意図を展示に反映させることに政治的なメディアとしての博物館展示を相対化していく契機を見出している。しかし、これらの主張に対していわゆる「地域博物館」としては、あくまで展示主体である博物館自身が展示を通して常に新たな地域像を提示し、相対化していく継続的な営みが必要ではないか。それは、「地域博物館」という、より利用者に身近であるが故の、展示する側・される側という二者の存在・関係が曖昧であるという性格を帯びた場であ

ればなおさらである。「地域博物館」が提示する「地域」とは、博物館側が自らの視点により構成し直し、切り取り、創り上げたひとつの見方であるということ、それを利用者に伝えるためには、博物館自身が常設展示を相対化していく諸活動が必要なのであり、テーマ性の強い常設展示であればあるほど、大いに問われるべき点であろう。それはメディアとしての博物館の責任でもあろうし、また今回の足立区立郷土博物館における新常設展示はそれを実現していくための大きな可能性を有していると思われる。

**註**

（1）博物館の改修計画およびそのねらいについては、（多田2009）を参照されたい。なお筆者は、設計が終わり施工の段階から民俗担当の専門員（非常勤学芸員）として業務に参加している。

（2）このあたりの内容については、別稿（内山2007）でも同様の整理を行っている。

（3）八木橋伸浩は歴史学の研究上における「江戸」や「近郊」などの用語の概念規定の曖昧さを指摘し、そのモデルを提示した。その上でこれらの領域概念は「状況によってはある領域の存在が否定されたり、領域相互の融合が生じたり、領域の位置関係が入れ替わったりする可変的なものである」と述べている（八木橋1993　pp.121）。

（4）土浦市立博物館では、常設展示により提示する地域像を特別展・企画展で相対化していくという取り組みが実践されている（塩谷ほか2008　pp.48－49.）。

**参考文献**

伊藤寿朗　1978「日本博物館発達史」伊藤寿朗・森田恒之編『博物館概論』学苑社　pp.82－218.

伊藤寿朗　1986「地域博物館論－現代博物館の課題と展望」長浜功編『現代社会教育の課題と展望』明石書店　pp.233－296.

伊藤寿朗　1991『ひらけ、博物館』岩波書店

内川隆志　1991「郷土教育の変遷Ⅰ－明治～昭和初期の郷土教育－」『國學院大學博物館学紀要』15　pp.54－65.

内山大介　2007「博物館における「郷土」・「地域」とその展示－「総合」という視角の系譜－」『歴史民俗資料学研究』12　神奈川大学大学院歴史民俗資料学研究科　pp.49－63.

加藤有次　1977『博物館学序論』雄山閣出版

倉田公裕　1979『博物館学』東京堂出版

塩谷修・木塚久仁子・中澤達也・宮本礼子・萩谷良太　2008「土浦市立博物館の展示改装と新しい取組み－地域博物館が目指すもの－」『土浦市立博物館紀要』18　pp.16－53.

多田文夫　2009「区立博物館での住民・団体との関係および常設展示改修の事例から」『Museologist』（明治大学学芸員養成課程年報）24　pp.5－11.

棚橋源太郎　1930『眼に訴へる教育機関』宝文館（伊藤寿朗監修1990『博物館基本文献集』第1巻、大空社に収録）

棚橋源太郎　1932『郷土博物館』刀江書院（伊藤寿朗監修1990『博物館基本文献集』第2巻、大空社に収録）
中村ひろ子　1998「『民俗を展示する』ということ」日本民俗学会編『民俗世界と博物館 展示・学習・研究のために』雄山閣　pp.14－20.
福島県女子師範学校　1933『福島県女子師範学校沿革誌』（仲新・石川松太郎編1982『日本教育史文献集成』第2部、師範学校沿革史の部9、第一書房に復刻）
福田珠己　1997「地域を展示する－地理学における『地域博物館』論の展開－」『人文地理』49－5　pp.24－45.
福田珠己　2007「『地域』と博物館」大阪人権博物館編『博物館の展示表象 差別・異文化・地域』pp.161－192.
八木橋伸浩　1993「江戸の近郊・都市の周辺－『近郊』『周辺』『周縁』等の概念をめぐって－」『史潮』33・34合併号、歴史学会　pp.107－123.
吉田憲司　2007「異文化と自文化の展示をめぐる新たな動き・2006」大阪人権博物館編『博物館の展示表象　差別・異文化・地域』pp.13－58.
吉見俊哉　1994「郊外」『社会学事典』弘文堂　pp.278
若林幹夫　2000「都市と郊外の社会学」『「郊外」と現代社会』青弓社　pp.13－59.
若林幹夫　2007『郊外の社会学－現代を生きる形』筑摩書房